

## ワシーリイ・エロシェンコの童話と相馬黒光

宇 津 恭 子

『赤い鳥』(1918年7月創刊)に代表される近代童話文学運動の最盛期に、流暢な日本語で数々のユニークな童話を書きのこして日本を去った、ロシアの盲目詩人ワシーリイ・エロシェンコ Vasilii Eroshenko(1889~1952)が、いま再評価されつつある。すでに『エロシェンコ作品集1 桃色の雲』、『同2 日本追放記』(高杉一郎編, みすず書房, 1974)が刊行されていたが、昨年12月には、没後30周年を記念する評伝『夜あけ前の歌——盲目詩人エロシェンコの生涯——』が、同じく高杉氏により上梓された。

他方、相馬黒光(1875~1955)はエロシェンコの日本滞在中、新宿中村屋の女主人として多忙を極める中で多くの彫刻家、画家、文学者、演劇人を包含する「中村屋サロン」の原動力となり、中心人物となって、多彩な文化活動にたずさわっていた。第一次世界大戦のため祖国から送金を絶たれ生活に窮したエロシェンコを黒光が引き取り、真実の息子のように面倒をみ、エロシェンコも黒光を「マーモチカ(母さん)」と呼んで尊敬したことは、よく知られている。エロシェンコが日本でつくった童話の大部分は、この中村屋時代の作品であったと思われる。彼の文学の核心にある人道的な理想主義と、否定する端から頭をもたげる宗教的な憧憬は、若き日の黒光にも深く呼応するものがあった。

本稿では、エロシェンコの童話創作に黒光がどのように関わったかという問題を考察してみたい。ただ、その確実な根拠となる資料は今のところ見当たらない。したがって、上記『夜あけ前の歌』や黒光の自伝的随想『黙移』(女性時代社, 1936)その他、エロシェンコと黒光がともに親しく交わった秋田雨雀(1883~1962)の日記などのうちに二人の交渉の記述をたどり、他方では、エロシェンコの作品それ自体のうちに、黒光との思想ないし心情的つながりを探るなどして、若干の推測を試みることしかできないであろう。

なお、黒光については多くの書物に語られているが、単行本になった伝記としては、相沢源七著『相馬黒光と中村屋サロン』(宝文堂, 1982)が新しい。筆者も小著『才藻より、より深き魂に——相馬黒光・若き日の遍歴——』(日本YMCA同盟出版部, 1983)に、黒光という人物の原点となった少女期、青年期の諸問題をまとめておいた。

### I

まず、エロシェンコが童話を創作する場の形成と、つくられた童話が文字に書きとめられる過程で、黒光がどんな働きをしたか、調べてみたい。

『エロシェンコ作品集1 桃色の雲』の編者「あとがき」によれば、日本滞在中の作品は、この第1巻に集められている。そのうち童話は20篇、ほかに童話劇が一篇含まれる。念のため20篇の表題を以下に記しておこう。順序は作品集における配列順による。発表年月、

発表誌などが明らかな作品は、それらも付記しておく。

沼のほとり  
魚の悲しみ  
鷺の心  
春の夜の夢  
松の子  
一本の梨の木——セルビヤの話

(1921. 1. 16~22, 『朝日新聞』連載)

海の王女と漁師

二つの小さな死

虹の国

(1921. 7 『我等』所載)

せまい檻

(1921. 7 『改造』)

理想花

(1922. 2 『種蒔く人』)

人類のために

学者の頭

変り猫

(1921. 3 『我等』)

幸福の船

木星の人間神

恩寵の濫費

(1920. 10 『我等』)

無宗教者の殉死

(1920. 12 『我等』)

カナリヤの死

若き天使の失敗

これらの「ほとんどすべては直接に日本語で書かれ」と、上記あとがきに述べられている。それは、日本語で口述筆記されるか、エロシェンコみずから日本語の点字で書くかした、という意味であろう。では、誰がエロシェンコの童話口述を筆記したのであろうか。評伝『夜あけ前の歌』には、親もとからの送金を絶たれた彼のために、「秋田雨雀や神近市子<sup>(1)</sup>が奔走して、エロシェンコが日本語で口述する童話を筆記し、ほんの一、二カ所手をくわえてはあちこちの新聞や雑誌に売りこんでくれた」とあり、そのひとつに、1916年(大正5)1月雑誌『希望』に発表された「提灯の話」があげられている。これによって、秋田と神近が口述筆者であったことは間違いなからう。だが「提灯の話」は、桑原三郎『＜赤い鳥＞の時代——大正の児童文学——』（慶応通信、1975）に言われているように、童話風な象徴的な作品ではあるが、童話ではない。それでは他にどんな童話を二人が書き取ったか、これについては『夜あけ前の歌』に何も語られていないのである。

『赤い鳥』に寄稿し（1918年10月より）、評論「童話の持つ使命」（『時事新聞』、1919年12

月19～21日)を<sup>(2)</sup>発表し、「芸術の様式として」の位置を童話に与えようと意欲を燃やしていた秋田が、エロシェンコの童話創作と無関係であるはずがなかった。ないばかりか、エロシェンコは東南アジアの旅(1916年7月～1919年7月)から帰った直後のこの時期、「二王子」と題する未発表の作品を書いた(1919年8月)<sup>(3)</sup>のを皮切りに、盛んに童話をつくり始める。まるで秋田の打込みに呼応するかのようである。

秋田の考えでは、童話は必ずしも年少の子供に読ませるものとは限らない。童話に表現される思想の世界は、「大人自身の子供の性質」——「永遠の子供 eternal childhood」<sup>エターナルチャイルドフード</sup>——がこうあってほしいと願う理想の世界でもある。「永遠の子供」とは、どこまでも育ていこうとする性質、自由でありたい欲望、美しいものを愛する感情、正義を愛する心である。童話は、人類が胸に抱くこの「永遠の子供」のために創作さるべきものだ、というのが秋田の主張であった。<sup>(4)</sup>当時エロシェンコが書いていたものが、まさにその通りである。ただ彼の場合、そこに鋭い諷刺がこめられるのが常であった。

ともかく二人は意気投合して童話芸術に打ち込んだにちがいない。しかし、エロシェンコの口述童話を秋田が書き取ることは、二人の頻繁な往来のわりに少なかったようである。『雨雀日記』(新評論社、1953)から、秋田がエロシェンコの創作活動を助けた記録を拾ってみよう。

#### 1915年(大正4)

- 11月9日 エロシェンコの「鳩の家」を訳して『時事新報』に送る。
- 10日 エロシェンコが来て、小説「螢籠」(すでに9月から創作している)を書く。
- 28日 エロシェンコが来て、21日の宮崎虎之助との宗教談をエスペラントで書く。
- 12月27日 エロシェンコがその翻訳をたのみに来る。

#### 1916年(大正5)

- 1月8日 「雨が降る」という題になった上記宗教談の筆記をつづける。
- 9日 「雨が降る」を翻訳執筆。『早稲田文学』に送ることにする。(2月号に掲載。)
- 30日 エロシェンコが来て、二人で小説「螢籠」(前年のつづき)を書く。
- 2月7日 エロシェンコの「女性問題とロシア民謡」を訳す。
- 4月4日 同「運命の頂」と俗謡を翻訳。
- 5日 露国民謡の「運命の歌」を翻訳して、エロシェンコに届ける。
- 15日 エロシェンコが水戸で行う予定の講演「『運命と経済』の歌」を、二人で訳す。
- 5月20日 エロシェンコが同夜芸術倶楽部で行う講演の草稿を二人で書き、倶楽部の席上で通訳する。

これらは、二人が童話文学に傾斜する時期から数年前の交渉の記録である。「鳩の家」と小説「螢籠」は、『エロシェンコ作品集』にも入っていない所在不明の作品であろう。あとの記録をみると、「雨が降る」は宮崎虎之助との宗教対談をめぐる小品であり、残りはいずれも

講演または民謡の翻訳（エスペラントから日本語へ）であった。童話に関する記述は何もない。このあとエロシェンコは前にふれた東南アジアの旅に出、3年後ふたたび日本に舞い戻ってから盛んに童話を書き始めるのである。

では、その1919年夏以降に、秋田がエロシェンコの創作活動を助けた記録があるだろうか。『雨雀日記』には次の一か所しか見当たらない。

1920年（大正9）

10月2日 明治会館における第7回エスペラント大会で、エロシェンコが自作の「ジプシイの予言」（秋田の翻訳）を歌う。

エロシェンコ自作の歌の翻訳ひとつである。秋田の記録洩れがあったことを考慮に入れても、やはり彼がエロシェンコの童話の口述を筆記することは少なかったと、考えてよいであろう。

神近市子がこの仕事にどれだけ関わったかは、よくわからない。しかし、『雨雀日記』を通して推察する限り、神近は、秋田ほど頻繁にエロシェンコと交渉をもつことも、熱心に仕事を手伝うこともなかったと思われる。

20篇の童話の文体はかなり多様である。エロシェンコが口述する童話を書きとる仕事には、ほかに協力者がいたと考えてよいであろう。その一人に、「童話作家としてすぐれた才能をもっていた」青年エロシェンコを「ことのほかかわいが」った、相馬黒光があげられるのである。

日本に来た翌年（1915）9月、エロシェンコは秋田と神近に伴われて黒光と初対面し、それ以来、ときどき中村屋に姿を現していたが、次の年の4月上旬、そのアトリエの住人として迎えられた。それから1921年5月28日、彼をロシア共産党と誤認した政府の国外退去令によって淀橋警察署に拘置されるまで、黒光の親身な世話を受ける。もっとも、その間に上述のシャム、ビルマ、インドの旅をしているから、本格的に腰を落ちつけたのはその後、つまり1919年初秋以降であろう。折しも日本では『赤い鳥』のほか『おとぎの世界』、『金の船』などが創刊され（1919年）、秋田雨雀は前にふれたように「芸術の様式としての童話」に力を入れ、黒光の周辺には児童文学の波がひたひたと寄せていた。

黒光は、目の不自由なエロシェンコをいつも自分の「隣りの椅子に坐らせ、食事の世話を」する<sup>(6)</sup>。「議論好きの皮肉屋で、偏屈」といわれるエロシェンコも、黒光には感謝し、信頼していた。南ロシア、クルスクの豊かな平原で両親兄妹らとすごした幼年時代の幸福な思い出を語る日もあり、4歳のとき麻疹の高熱で失明して闇の世界に投げ出されたこと、「村の祭りに男の子たちがサーシャやナターシャと手を引き合って出て行くのに、自分だけは祖母さんに手を引かれていて淋しかった」ことなど、「悲しい物語り」をする日もあった。しかしまた、アトリエには「バラライカを弾きながらロシアの民謡を歌」うエロシェンコの美しい<sup>(8)</sup>声が響き、時には黒光がピアノを、エロシェンコがヴァイオリンを弾いて合奏するなごやか

な光景もくり広げられた。久しく味わえなかった家庭のぬくもりを取り戻したエロシェンコの心に、幼き日の追憶から素材を得たメルヘンが次々に芽吹いたとしても、不思議ではなからう。

黒光は、こうしたエロシェンコのために「よくいろいろの文学的作品を読んできかせ」、「エロシェンコはそれを非常によろこ」んだ。小説が読まれ、脚本が読まれた。これを動機として、黒光、秋田、佐々木孝丸ほか数名の脚本朗読会「地の会」（「土の会」）が中村屋で始まる。『雨雀日記』同年（1920）6月25日の条に、「夜、相馬さんの宅で第三朗読会をひらいた」とあり、以後7月16日までは毎週この会の記録がある。この事実から、第一回は6月11日に開かれたと推定されるであろう。実はこの頃エロシェンコが中村屋と何か問題をおこしている。同日記5月24日の条に、「（エロシェンコが）中村屋と具合が悪いらしい。気の毒だ」とある。朗読会の発足には、こうしたエロシェンコの窮地を救い、中村屋における彼の立場を安定させようという、女主人黒光の配慮もあったと思われる。エロシェンコは朗読の聴き手としてメンバーの一人であり、時には自分の童話が読まれるのに耳をかたむけていた。秋田の日記はただ一度、同年11月25日「エロシェンコの童話を朗読した」と記録しているだけであるが、『桃色の雲』の「あとがき」は、彼の童話が「ほとんどすべて中村屋の脚本朗読会で朗読されたものらしい」としている。「地の会」がエロシェンコ作品発表の場にもなったのであろう。黒光の熱心な働きかけがそこにあったにちがいない。

「すぐれた才能に恵まれたエロシェンコが本国の革命のためにその才能をのばす機会を失ったことに同情した黒光<sup>(11)</sup>」は、せめて彼の日本滞在中の童話が世に知られることを願った。その最後の働きも見逃すことができない。エロシェンコが国外退去を命ぜられ、淀橋警察署に拉致されるとすぐ、親しい人たちの間で彼の創作集出版の話がもちあがった。黒光は機を逸せず、翌日エロシェンコに面会を求め、立会う刑事の面前でその序文を口述させ、手早く書きとった。敦賀港に向けて護送される前夜（1921年5月31日）である。これが同年7月17日叢文閣から出版された第一創作集『夜明け前の歌』に「自序」として収められる。なお、黒光は同夜エロシェンコのために手紙3通の代筆もしている。こうしたことは、平素から彼の身近で心理的なスポンサーの役を進んでひきうけ、その口述を筆記し慣れた人でなければ、思いつくことも実行することもできない行為であろう。盲目のエロシェンコが物語る童話を書きとった友の一人に黒光がいたと考える根拠は、こういうところにもある。

以上、エロシェンコの童話文学が生み出される場の形成と口述筆記に、中村屋の黒光がほかの誰にも代われない役割をもった三つの事実をみてきた。次には作品に織りこまれたエロシェンコ思想の、どんなところが黒光と共感的であったかを、エロシェンコの側から考えてみたい。

## II

エロシェンコの日本時代の創作童話20篇のうち、特に黒光と関連が深い内容をもった作品2篇をとりあげてみよう。

先ず、比較的初期に書かれたと思われる「魚の悲しみ」がある。鮎の子ども「鮎太郎」を中心に、ドジョウ、鯉、兎、ウグイス、ホトトギス、蜜蜂、大蜂、蝶、蛙などが大自然を舞台にくり広げる、善意と希望に満ちた平和な世界が、人間のエゴイズムと残酷性によって突如破壊される話である。エロシエンコは淀橋署で黒光にうながされて創作集の序文を口述したとき、これを「芸術家の悲しみとして書いた」と言っている。以下に梗概を述べておこう。

冬のあいだ厚い氷に閉じこめられ、池の底でじっと耐えていた鮎太郎が、春が来たので川に出て自由に泳ぎまわり、周辺の動物、小鳥、昆虫たちと仲好くなる。ウグイスやホトトギスが聴かせてくれた地上のうわさ話で殊に鮎太郎を喜ばせたのは、人間についてであった。世の中では人間がいちばん偉く、賢いと聞き、鮎太郎は会いたくてたまらない。

夕暮には遠い教会の鐘の音に皆で耳を傾ける。その鐘が皆の平和で楽しい生活を願う人間の祈りだときくと、鮎太郎たちも人間の幸福のために祈りをささげる。

その教会の牧師の坊ちゃんは、賢くおとなしいので評判だった。或日その坊ちゃんが突然現れ、兎、ウグイス、蛙、大蜂などを次々に捕り去ったので、池の辺りが大騒ぎになる。偉い人間がすることと思えないその仕打ちに、鮎太郎たちは暗たんとする。そこへ、教会から帰った蝶が更に衝撃的な話を伝える。神様が呼んでくださる「あの国」に行けるのは、魂が与えられている人間だけです。魂のない「私どもは、ただ人間をよるこぼせるために、人間の食物になるためにつくられたものだそうです」と。

不幸な運命を悲しみ、生きる望みを失った鮎太郎たちの池に、翌朝また坊ちゃんが現れる。鮎太郎は怒りにふるえ、「さあ、私をつかまえてくれ！ほかの者がとらえられて殺されるのを見るのは、自分が殺されるより苦しい」と叫んで、網の中へ入ってしまう。

教会の坊ちゃんの部屋では、ウグイスと兎の皮が壁に掛かり、蝶たちがピンで貫かれ、解剖されたばかりの蛙の心臓がまだ動いていた。それを見た鮎太郎の胸はしめつけられる。しばらくして坊ちゃんが解剖のメスを入れると、鮎太郎の心臓はすでに破裂していた。しかし、その原因が悲しみのためだということを坊ちゃんに説明できる人は、誰もいない。

この坊ちゃんは、あとで有名な解剖学者になる。そして池には教会の鐘の音を聞きに出るものがひとりもいなくなる。

以上が「魚の悲しみ」のあらすじである。

鮎太郎たちが春を謳歌する場面は、明るく美しいメルヘンの世界である。一部を引用しておこう。

その春は、ほんとうに愉快でした。朝からウグイスやホトトギスなどのえらい音楽の先生たちが独唱したり、蜜蜂の娘さんたちや大蜂の姉さんたちが合唱したり、蝶の踊子たちが舞を舞ったりしますし、晩になると蛙のいとこの詩人たちが歌の会や演説会を聞いて夜おそくまで騒いでいました。

夕暮になって、遠い教会の鐘が鳴りだすと、魚の兄さんたちは水の上に浮び、蛙のいと

こたちは岸の上に腰かけ、蝶の姉さんたちは花の上に坐って、みんな静かに晩鐘の音に耳をかたむけました。その鐘の音は、人間の兄さんたちが、自分たちの弟にあたる樹の上の鳥たち、水のなかの魚たち、花のなかの昆虫たちに、平和でたのしい生活を祈っているのだということでした。そこで、魚や蛙やウグイスたちもみんな、人間の兄さんたちが幸福に生活できるように祈りました。うつくしい花の匂いと、夕暮の金色の光をもったその祈りは、静かに「あの国」の神様のところにあがってゆきました。

(『エロシェンコ作品集1 桃色の雲』 P. 55~56)

ところが作者は、突如そこに人間のエゴイズムと残虐性を大寫しにしている。鮒太郎と仲間たちがその横暴な権力者の餌食にされ、善意と友愛と平和に満ちた彼らの世界も破壊される。そして作者自身は鮒太郎たちの側に立ち、その悲しみをどこまでも共にする。

鮒太郎には、エロシェンコの宗教的な憧憬が投影しているであろう。友達の苦しみを見ていられずに、自分が代って命を投げ出す。しかしその真意は誰にも知られず、一見無意味な死を遂げる。「友のために自分の命をすてること、これより大きな愛はない」(ヨハネ15章13節)と言われたキリストのイメージが、この鮒太郎にちらついている。それは、エロシェンコの童話文学を貫く主要なモチーフのひとつなのである。

しかし、「魚の悲しみ」はもうひとつの問題を含んでいる。坊ちゃんは教会の人間であった。世界を救うために自分の命をすてたキリストの愛を説教する牧師の、一人息子であった。その坊ちゃんが勝手気ままな楽しみのため小さな命を奪っている。それを有るまじきこととした鮒太郎たちは、かえって自らの存在の悲しい意味を牧師から聞かされる。人間以外のものは、人間の衣食や楽しみに利用されるためにだけつくられているのだと。梗概には省略したが、エロシェンコは最後を次のようなことばで結んでいる。

作者の私も、そのときからもう教会にはいきません。すべてのものを、人間の食物やおもちゃとしてつくるような神様に、私は祈りたくないのです。

(同上, P. 61)

前半の敬けんな世界は後半で一挙にくつがえされ、いわば背教者のポーズが前面に押し出されることになった。

しかし評伝『夜あけ前の歌』によれば、エロシェンコは「最後まで無神論者や唯物論者というような存在からは遠かった」。「宗教的なあるものにたえず心をひかれていた」<sup>(12)</sup>。ビルマから日本の友人に送られた書簡にも、こうしたエロシェンコの内面が表れている。宗教も科学も疑うという言葉の端から、十字架上のキリストの心境を想像し(1917年4月15日、鳥居篤次郎宛)<sup>(13)</sup>、キリストの言葉(マタイ16章24節)を引いて、自分の十字架を負って生きなさいと励まし(同8月22日、吉田均宛)<sup>(14)</sup>、「主よ、いまこそあなたは、み言葉のとおりこの僕を安らかに去らせてくださいます」(ルカ2章29節)といった老シメオンに自らの心理をな

ぞらえる（同11月12日、鳥居宛<sup>(15)</sup>）等々。このように、エロシェンコの魂の深みにおいて宗教的な渇きは消えることなく、そのヒューマンイズムの根底には聖書のことばが生きつづけていた。それにもかかわらずエロシェンコは、日常触れるキリスト教界の具体的な在り方に、かなり批判的であった。

同評伝は、4歳のとき失明して光の世界から別れなければならなかったエロシェンコが絶えずいらだち、ひどく気むずかしい子どもになったと述べている。また、失明の原因が彼の病気を医者に診せることをかたくなに拒んだ叔母の迷信的な処置によることを知ったとき、宗教的迷信というものを激しく憎んだ。更には、自ら望まずして投げ込まれた闇の世界から、どんなことにもまず疑ってみることを学んだ。「わたしはなんでも疑ったし、どんな権威をも信じなかった。わたしは神は善であるということも、悪魔は悪であるということも、ともに疑った」と、エロシェンコ自身書いている。これは18歳まで在学した盲学校の生活を描いた「ある孤独な魂——モスクワ第一盲学校の思い出<sup>(16)</sup>」の一節である。正門にロシア皇帝の紋章を掲げたその学校の帝政ロシア末期の教育が、社会の権力者や教師の権威主義に対する抵抗意識を少年エロシェンコの心に育てたという。その意識は、宗教的な指導者に向けられたものでもあったと見てよいであろう。

日本の友人たちとの会話にも、こうした問題が引き出された。エロシェンコが国外に追放された後、加藤一夫が彼をしのんでつくった詩に次の一節がある。

……そのころの君は 宗教的な詩人だった  
 僕らは君の信仰をぶちこわそうとした  
 君がとりつかれている幽霊を退治しようとした  
 僕はあとで あのときの僕の議論があまりに無慈悲であったことをさとした  
 しばらくのあいだ 僕の頭はあのときのことを悔いる心でいっぱいだった  
 今もそのことを思うと僕の胸はいたむ  
 故国を失った漂浪の旅にある君だ  
 わずかに思想と芸術と信仰とで その友をもとめていた君だ  
 それなのに それなのに 僕の言葉はあまりに峻烈であった

（『夜あけ前の歌』 P. 254）

若い頃キリスト教伝道に挫折した経験をもつ加藤の言葉は、「宗教的な詩人」エロシェンコの内面に深い陰りをのこしたにちがいない。こうした議論が、さらに他の友達との間に発展したであろうことも十分考えられるのである。

「魚の悲しみ」が最後に示した背教者のポーズは、以上のような屈折体験を背景にしたものであった。

しかし、「魚の悲しみ」の中心テーマは既にみたように、「友のために自分の命を投げ出すほどの深い愛」にかけた青年エロシェンコの夢であり、憧憬であった。それは彼の皮肉や諷



刺の世界とは裏腹の、いわば至福の境地であった。

同じモチーフで書かれたもう一つの童話、「二つの小さな死」も意味深い。「私は涙と血をまぜて書いた」と、エロシェンコが日本から追放される時黒光に口述した作品である。彼は富者と貧者、権力者とそれに虐げられる弱者とを対比させ、自らは貧者、弱者の側に立つのが常であった。この童話の人物設定がその典型である。主人公は貧しい労働者の子、これと対比して描かれるのは金持ちの坊ちゃんである。

静かな病院の特別室で、この坊ちゃんが「死」を待っている。向うの病室でも労働者の子が死を待っている。特別室ではサン・ペルナルの犬、カナリヤ、鉢植えの花などが坊ちゃんを慰めているが、労働者の子には何も無い。しかし彼は、自分と同じように窓から空を眺めている坊ちゃんに「あたたかい兄弟のような愛と親しみの心」を感じる。

「死」が近づき、労働者の子を唆して言う。愛する坊ちゃんや、その犬、カナリヤ、花などの命を「死」に渡せば、代りにお前の命を少しのぼしてやろうと。だが労働者の子は自分が死ぬほうを選ぶ。そのとき初めて、自分が「生きている」ことを実感する。

次に、「死」は金持ちの坊ちゃんに近づく。坊ちゃんは、愛する花、カナリヤ、犬、そして労働者の子の命をも「死」に渡し、自分の命を日没までのぼしてもらうほうを選ぶ。しかし、そのあと、いつまでもむせびないている。

翌日、金持ちの坊ちゃんの盛大な葬式があり、同じ時刻に労働者の子もひっそりと葬られる。ただ一人貧しい棺を送り出した若い看護婦が、思い定めたように言う。「私も行く。私もいかなければならない。真理はそこにある」と。看護婦は静かに貧民窟をさして歩いて行く。

以上が「二つの小さな死」のあらすじである。「魚の悲しみ」より思想的な深まりが見られるところは、坊ちゃんの命を救うために自分の死を選んだ労働者の子に、かえって「生」をいきいきと体験させた場面である。作者エロシェンコは、そこに「真理」があることを示すために、労働者の子の死をみとった若い看護婦を最後に登場させる。彼女は「死から生へ」の真理をさと、静かに貧民窟の方に歩いて行く。貧民窟に向かわせているのは、「友のために自分のいのちをすてる」愛が、富や権力の眩惑から解放された人々によってのみ実現されることを、暗示したかったからであろう。

中村屋の「地の会」でエロシェンコの童話が朗読された或夜、黒光の夫、愛蔵が「またエロさん（エロシェンコの愛称）のお説教がはじまったね」と笑い、ある人は「エロさんの童話は観念があまり露骨すぎやしないか」といったそうである。本稿にみてきた「魚の悲しみ」と「二つの小さな死」にも、それはいえるであろう。説教臭、観念臭がかなり強い。しかし、こうした批評に対しては秋田雨雀が次のように弁護している。「観念が露骨にでるかでないかといこうとは、その作者の社会意識なり、その作者を生んだ社会状態に支配されることであって、観念をあらわすのがいちがいにはわるいというふうに見るのは、おかしいんじゃないか。観念のとぼしい、というよりはむしろ皆無な日本の文壇に、エロさんのような美しく燃えた観念の火を投げるのは、かえって意味があると僕は思う」と。<sup>(17)</sup>

黒光も秋田と同じ意見だったにちがいない。彼女はエロシェンコの童話に織りこまれた思想、憧憬、社会正義への鋭い感覚などを、その内側から理解し、共鳴し得た人である。

エロシェンコのヒューマニズムの根底には、ロシア正教の伝統的な信仰心に育まれた幼少期が考えられる。黒光も、子供のころ卓越したキリスト教指導者（押川方義と島貫兵太夫）の薫陶を受け、その信仰の揺籃期で自分の一生が決まったようなものだと言っている。

社会から疎外され、あるいは虐待された不幸な人や貧しい人の側に立ち、その悲しみを共にし、彼らの代弁者となったエロシェンコの心は、黒光の心でもあった。彼女は貧困と逆境のうちに生き立ち、実人生の悲惨を知りつくしていた。

貧者、弱者として描かれた「鮎太郎」や「労働者の子」には、「友のために自分の命を投げ出すほどの深い愛」への、エロシェンコの夢が託されていた。黒光にも、そうしたエロシェンコに共通のみずみずしい憧憬<sup>(12)</sup>があった。

「魚の悲しみ」の最後に背教者の姿勢をとったエロシェンコの心から、宗教的な渇きが消えることはなかった。若き日の黒光にも、そうしたひとこまがある。宗教の本質から逸脱した教会社会の現実と教育に懐疑し失望して、教会から離れても、黒光は、なお神を求めつづけた。

このように、二人の間には思想的、情情的に深く共感するものがある。黒光がエロシェンコの創作を助け、その口述を筆記するのは自然の成り行きだったであろう。

なお、本稿にみた二つの作品の成立後、1920年（大正9）後半には、日本の社会主義運動が急激に高まっている。12月9日結成の社会主義同盟には小川未明、秋田雨雀ほか多くの作家、評論家が加盟した。エロシェンコも彼独自の見地からこの運動に足を入れ、翌年の国外退去令の原因をつくる。彼の社会運動には常に宗教的な下地があったとはいえ、運動参加は作品を大きく変ぼうさせた。したがって、それからの童話と、黒光との関わりについては、あらためて検討しなければならないであろう。

## 註

- (1) 神近市子（1888～1981）は、エロシェンコの口述筆記をした1915年（大正4）頃『東京日日新聞』の記者であった。同年9月、秋田雨雀とともにエロシェンコを新宿中村屋に同伴した時、彼を黒光に紹介したのがこの神近である。
- (2) 『雨雀自伝』（新評論社、1953）P.76
- (3) 高杉一郎『夜あけ前の歌——盲目詩人エロシェンコの生涯——』（岩波書店、1982）P.187
- (4) 秋田雨雀『太陽と花園』（精華書院、1921）序文
- (5) 中村屋編『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』（1968）P.19
- (6) 相馬黒光『黙移』（『相馬愛蔵・黒光著作集3』、郷土出版社、1982）P.250
- (7) 白井吉見『安曇野』（筑摩書房、1972）第三巻 P.165
- (8) 註(6)に同じ。
- (9) 『黙移』P.252
- (10) 『安曇野』（P.392）は、「地の会」の発起人を秋田雨雀、佐々木孝丸、エロシェンコとし、その会場に中村屋を、との彼らの申入れに、黒光が、「神近市子が結婚してしまって、可哀そうなエロシェン

コを慰めるには恰好な催し」という理由で快諾したとしている。エロシエンコは神近に思いを寄せていたが、神近は、この年（1920）評論家鈴木厚と結婚した。

なお、「地の会」で朗読された脚本について、同書は「雨雀の『国境の夜』『三つの魂』のほか、イブセン、チェホフ、ゴーゴリなどからえらばれた」としている。

- (11) 註(5)に同じ。
- (12) 『夜あけ前の歌』P. 129
- (13) 高杉一郎編『エロシエンコ作品集 2, 日本追放記』（みすず書房, 1974）P. 372
- (14) 同上, P. 385
- (15) 同上, P. 392
- (16) エロシエンコ「ある孤独な魂——モスクワ第一盲学校の思い出」。原題は「私の学校生活の一ページ」で、1923年に上海で出版されたエスペラント創作集『Gemo de unu Soleca Animo』に収められた。高杉一郎氏によるその日本語訳が、上記題名で『エロシエンコ作品集 1, 桃色の雲』冒頭に置かれている。
- (17) 『夜あけ前の歌』P. 225～226
- (18) 『相馬愛蔵・黒光著作集 1, 穂高高原』中の「おじいさまのおはなし, 百姓の親の加助」P. 204～213 参照。